

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4079600534		
法人名	特定非営利活動法人あたか		
事業所名	グループホームあたか		
所在地	福岡県田川郡川崎町大字安真木3083-2		
自己評価作成日	令和4年7月1日	評価結果確定日	令和4年7月25日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和4年7月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームあたかは、自然豊かな山里にあります。耳を澄ませば、鳥のさえずりが聴こえてきます。敷地内の畑で採れた野菜たちが、毎日の食卓を彩ります。窓からは、緑いっぱいの美しい山々が見られます。春…淡い色の春紅葉と黄緑色の木々が気持ちをやわらげてくれます。初夏…暖かな日差しと新緑の爽やかな薫りに癒されます。秋…眩いほどの色彩があふれる紅葉は心を鎮めてくれます。冬…凜とした澄み切った空気に身が引き締まります。利用者のみなさまは、毎日、そんな自然あふれる山々の景色の中から、四季を感じ楽しんでおられます。恵まれた環境の中で自然と触れ合い、ゆったりとくつろげる時間を大切に、心身のリラクセスを図っておられます。また、家庭的な雰囲気大切にしながら、少しでも役割を持つことで生きがいや日常生活の活性化に繋げ、笑顔で安心して生活していただける支援を行っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

基幹道路傍の公共掲示板の下に「グループホームあたか」への矢印が掲示され、現在3名の入居者があるなど、地域に根付いたホームとして篤い信頼を得ている。朝礼の話し合いはモニタリングや担当者会議の場となり、極度の難聴で被害妄想や暴言がある入居者に、レクリエーションでの朗々とした歌声に拍手があるなど、「心通い合うサービス」が展開している。食材の取り合いになるほど下ごしらえは好評で、力量発揮の場となり、味付けが濃いと意見が出ることも食事の楽しみとし、役割を持って生活する喜びを感じてもらいたいと、日々の関わりから思いや意向の把握に務めている。コロナ禍の中、運営推進会議内容は書面報告であるが、家族にはホーム便りやラインの動画で暮らしぶりを報告し、医療連携しながら、運営目標としている「その人らしい日常生活支援」や「共感」の実践に日々邁進している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名

グループホームあたか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「その人らしい日常生活を支援」「共感」「心通い合うサービスの提供」を念頭に置いて、日々のケアを行っている。	廊下や事務室に社是や理念を掲げ、研修時等に、寄り添いながら入居者の話を聞いているか、振り返りをしている。適切な排泄支援で、その人らしい生活を支援したいと話す職員から、理念の実践が伺える。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入している。コロナ禍のため、地域の祭りやイベントへの参加はできていないが、日課の散歩中に地域住民との交流がある。地域の利用者も多く、現在は3名が地域住民である。	基幹道路傍の公共掲示板の下に「グループホームあたか」への矢印が掲示されている。開所18年目となり、地域に根付いたホームとして、入居相談を受け、現在3名の入居者があるなど、篤い信頼を得ている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	日課の散歩中に出会った地域住民との雑談の中からホームの日常や認知症である利用者の様子を見てもらうことで理解に繋がっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍のため、2ヶ月に1度の書面開催となっている。写真付きのお便りでホームでの様子を分かりやすく報告している。	感染防止に配慮し、定期的に運営や入居者の状況を書面で運営推進会議のメンバーである地域包括支援センターや民生委員、家族代表に報告しているが、特段の意見はない。	運営推進会議設置目的に鑑み、全家族に、運営推進会議の開催状況や会議内容を報告し、意見表出の促しを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	コロナ禍のため、運営推進会議で顔を合わせる機会がなくなり、対面ならではの話しやすさがなくなり寂しく思う。事務手続きの関係で町役場や包括、福祉事務所に出向く機会が度々あるので、関係性が希薄にならないように気を付けている。	昨年の指定更新の際の指導を運営に活かしたり、ケースワーカーからの当該入居者の暮らしぶりの問い合わせに随時対応するなど、日頃から連携に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的な研修を行い、全職員が身体拘束に関して正しい理解を深めている。勝手口から自由に園庭に出て、草取りや花の水やりを行う利用者もいる。	定期的に身体拘束適正化委員会を開催し、具体的な身体拘束についてオンライン研修などで周知している。止むを得ない拘束はなく、転倒のリスクに配慮し、家族の了解を得てベッド傍にセンサーを設置している入居者もある。難聴や声高に高圧的な方言もあるが、心情に配慮した対応に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的な研修を行うことで、全職員が虐待防止についての共通認識を持ち、事業所内での虐待が見過ごされることのないように注意を払っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	開設以来、制度を利用した事例はないが、もし相談があれば、管理者主導で説明や手続きなどが適切に行える体制を整えている。	日常生活自立支援事業や成年後見制度の利用や関係機関と協議し活用を検討している入居者もないが、状況に応じて活用を支援するために、パンフレットを整備している。	今後、多様な家族構成や親族の高齢化が予測されることから、日常生活自立支援事業や成年後見制度の内容やその違いに関する研修会への参加や実施を期待します。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、説明が一方向的にならないようにしている。利用者や家族が十分に理解・納得をしているか、不安や疑問点はないか気をつけている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者とは、雑談の中から要望や思いを汲み取っている。家族には、毎月の利用料請求書を送付する際、日頃の様子や病状に加えスナップ写真を添付している。また、希望者にはLINEで動画を送っている。	家族の面会時などに、運営に関する率直な意見を伺うなど、関係作りに配慮している。コロナ禍の中、窓越しの面会に家族の意見はなかったが、気候に左右されず面会できるように昨年10月から玄関内に面会コーナーを設置している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングを兼ねた朝礼を時間をかけて行い、単なる申し送りにならないようにしている。また、手の空いた時間帯に、おやつ時間を設け、雑談の延長として意見や提案が出しやすい雰囲気になっている。	運営者は、日々関わっている介護を通じて個別に意見を聞くこともあるが、朝礼時に時間を設けたり、話しやすい環境をと、おやつタイムを設けている。職員の提案で排泄援助物品を居室に搬入するキャスト付きワゴンを購入している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、介護業務を積極的に行っている。職員と同じ業務を行うことで、個々の努力や実績、勤務状況を把握しやすい環境にある。年に2回、評価シートによる評価を行い昇給や賞与の目安にしている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	労働基準法に添って労働環境を整えている。採用にあたっては人間性を重視している。 ハローワークより、口コミや紹介で入った職員がほとんどである。	40代～70代の男女の職員が勤務し、中には開所以来就労している職員もある。夜勤専従やパート職員など、希望の時間帯に応じたシフトを組み、オンラインでの研修などで知識やスキルの向上を支援している。入浴を拒否する入居者に、スキルや経験を發揮する職員もある。資格より入居者に優しく寄り添えることを重視しているが、入職希望がないのが現状である。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	高齢者虐待に関する研修会を行っている。方言での声掛けはきつく感じる場合もあるため、気を付けている。不適切な声掛けが利用者の自尊心を傷つける心理的虐待に通じる可能性を十分に理解し、慎重な言葉かけを行うようにしている。	タイムレコーダーの近くに、不適切なケア内容が掲示され、言葉による拘束も職員同士で注意するよう取り組んでいる。入居者の暴言を、家族から伺った生活歴などの情報で納得することもあるなど、入居者だけでなく職員の人権にも配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、毎日職員と共に介護業務を行っているため、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	他の事業所のケアマネを通じて、情報を得ることもある。良い点は積極的に取り入れ、注意点はより一層の注意を払い、サービスの質の向上に役立っている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の事前面談の際には、本人と家族から普段の生活の様子や要望を伺い、スムーズに新しい生活に移行できるようにしている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の事前面談の際には、まずは傾聴することに徹している。その会話の中から家族の不安や要望が出れば、それに対して施設ではどのような対応を考えているか具体的に伝えることで、不安の解消に努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	まずは、入所に至った経緯である第一の不安が解消され、安心して新生活が送れるようなプランを提案している。コロナ禍以前は、訪問マッサージやリハビリなど、他のサービスを利用する利用者もいた。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	炊事・洗濯・掃除などの家事を、その方の残存能力にあった範囲でお願いしている。利用者が介護される一方の立場にならないように心がけている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会や電話連絡の際には、利用者の日頃の様子を具体的なエピソードを添えて伝えるようにしている。困りごとがあれば、家族に相談することもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出の際には、自宅や馴染みの場所を経由することで、思い出話に花が咲くこともある。面会の際には、施設での具体的なエピソードを交えた日頃の様子を伝えることで、話が弾み楽しい時間を過ごしていただけている。	玄関入口にソファやテーブルを設置し、飛沫防止用のシールド越しで、人数や時間を制限した面会をお願いし、散歩の途中でホームに立ち寄る親族もある。無人の自宅を見に帰ったり、家族などの年賀状を出す入居者もあり、馴染みの場や人との関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の生活の中で、利用者同士の触れ合いが楽しい時間となるように支援し、自室に籠りがちにならないようにしている。また、職員が会話の橋渡しをすることで、受け身の利用者も上手くコミュニケーションが取れるような支援に努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	親族や退去者のつながりで入居される方が多い。 コロナ禍前は、利用者の通院時に退去者の見舞いに行くことも多かった。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話の中から一人ひとりの思いや希望を引き出すように努めている。意思の疎通が難しい利用者の場合は、日々の生活の中から出てきた言葉や表情から思いや希望を読み取っている。	役割を持って生活する喜びを感じてもらえるように、日頃の関りから意向を把握したり、言葉だけではなく身振り手振りを交えて意志の疎通を図り、できることを支援している。熱中しすぎて休息しないため、服薬について相談した入居者があり、支援の目安を苦慮すると管理者は話している。	入居者の言動を評価するのではなく、どうしてかと分析し、背後にある感情を共感的に理解し、さらなる意向や思いの把握を期待します。
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの情報や本人の昔話の中から、これまでの暮らしぶりや馴染みのものの把握に努めている。それらの情報を全職員で共有することで、より良いサービス利用につながるようにしている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の健康状態や過ごし方、本人の発した言葉はそのまま記録し、一人ひとりの現状を全職員がいつでも共有できるようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々変化する利用者の心身の状態は、毎朝礼時に共有し、意見やアイデアを出し合い、その日その日の現状に即したケアを行っている。何より本人がより良く暮らすことを第一とした課題とケアのあり方を反映した介護計画を作成している。	朝礼の話し合いはモニタリングや担当者会議の場となり、状況に応じた支援を実践している。誤嚥を防止するために、ゆっくりとした咀嚼や嚥下、食べる姿勢が課題の入居者もあるが、極度の難聴で被害妄想や暴言がある入居者がレクリエーションで歌う朗々とした歌声に拍手があるなど、「心通い合うサービス」が展開している。	実践しているケアをサービス内容に記載し、P(計画)D(実行)C(評価)A(改善)サイクルの推進で、より現状に即した介護計画やケア内容の見直しを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や本人の発した言葉をそのまま個別の記録に記入している。気づきや工夫は、ミーティングや申し送りを待たずにその都度職員間で共有することで、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族のニーズには、可能な限り対応している。既存のサービスに捉われない柔軟な支援を行うことで利用者の笑顔、家族の安心感を得られるように努めている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	季節ごとに花や草木の見学に行っている。単調な生活にならないように、定期的に心身のリフレッシュを行っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人及び家族の希望を大切に、入所後も協力医療機関に限らず、かかりつけ医へそのまま受診を続けている利用者もいる。また、必要に応じて市外の医療機関や複数の医療機関への受診も行っている。	全入居者の入居前のかかりつけ医受診を支援している。管理者が受診に同行し、バイタルや服薬状況を報告し、医療連携に努めている。服薬等の変更は随時家族に報告し、全職員で共有している。残歯や歯痛などは随時歯科医の往診を支援している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は昨年まで介護職員を兼務しており、夜勤もこなしていた。そのため、一日を通して一人ひとりの心身の状態を把握しやすい立場にある。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は定期的に病院に通い、看護師から情報収集を行っている。その様子から、通院治療が可能であると判断できたら、担当医師との面談を申し入れ早期の退院を支援している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化対応の指針を整備し、入居時に説明している。状態に応じてなるべく早い段階で話し合いの機会を設けることで、本人と家族が今後の生活について十分に考える時間が持てるようにしている。	指針に基づき、食事や水分が取れなくなり、脱水や衰弱がみられる状態になると、次の生活拠点への支援に繋げている。現在終末期の入居者はいない。ホームで終末期を支援するには、職員数、終末期の知識やスキルなど職員の力量が必要と、管理者は話している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ケースごとのマニュアルを整備し、急変や事故発生時に備えている。また、実際に起きた事故やヒヤリハット事案は、直ちに全職員で共有し、初期対応に遅れはなかったか、適切な対応であったかを振り返り、今後のケアに活かしている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害防災計画を整備し、年2回の避難訓練を行っている。代表者の自宅が隣接しているため、災害時には昼夜を問わずいち早く駆け付けることができる。井戸水が利用でき、食料品や日常生活品の備蓄も十分にある。	年2回、夜勤帯で避難訓練を実施したが、けたましい非常ベルが鳴っても入居者の反応がなく、歩行が自立している入居者もあるが、声かけや搬送順番が課題となっている。備蓄一覧表や個々の入居者の持ち出し書面を整備している。	重要事項説明書に非常災害時など、地域の連携が必要不可欠な事態となった際の一時避難や災害難民の受け入れを明記していることを踏まえ、自治会や地元消防団との互助体制構築を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重した声かけを心掛けている。稀に、親しさから友達のような話しかけになることもあるため注意を促している。利用者の言動は否定せず肯定的表現で受け止め、尊厳を傷つけないようにしている。	同姓の場合は名で呼称している。丁寧な声かけや対応で、居室間違いもトラブルには至らず、人の気配があるほうが良いと居間のソファで昼寝をする入居者もある。何より、散歩時入居者の豊富な農作物の知識に感服すると話す管理者から、日頃の対応が伺える。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者との会話を楽しむ職員が多い。そのため、本人が思いや希望を表しやすい雰囲気になっている。重度化により自己決定の難しい利用者に対しては、家族やまだお元気な時に発していた言葉から推察し働きかけている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのその日の体調や気分を考慮し、できるだけ利用者の希望に沿った支援を行っている。重度化が進み、日々体調の変化が著しい利用者に対しては起床時間や食事時間をずらすなど、無理のない日常生活を支援している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月に数回美容の日を設け、施設内でヘアカットを行っている。また、着替えの際には好みの服が選択できるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	自家菜園や裏山で採れた旬の食材の下ごしらえは、利用者の楽しみの一つである。食事の準備に携わることで自然と会話も弾み、楽しく美味しい食卓となるように心がけている。	調査日、女性入居者全員で昼食のちらし寿司に彩を添えるインゲンの筋取りをしている。食材の取り合いになるほど下ごしらえは好評で、力量発揮の場となっている。日頃から完食する入居者が殆どであるが、味付けが濃いとの意見が出ることも、食事の楽しみとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとり、食事量・水分摂取量を記録している。健康状態や嚥下機能を考慮した食事を提供している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの口腔状態や本人の残存能力に応じた口腔ケアを支援し、清潔を保っている。歯茎の衰えから、義歯が合わなくなり痛みや噛み合わせが悪くなることもあるため、定期的な歯科往診で、義歯の調整や作り変えを支援している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	24時間排泄管理シートで一人ひとりの排泄パターンを把握している。排泄パターンを理解することで、排泄の失敗を減らしたり、時間帯や体調によってトイレとポータブルトイレを使い分けたり、尿取りパッドのサイズを使い分けたりしている。	全入居者にマイボトルを用意し、水分摂取を促している。排泄が自立している入居者もあるが、個々の排泄パターンを把握した声かけや誘導でトイレでの排泄を支援し、陰部洗浄や温浴タオルの清拭で褥瘡予防に努めている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維の多い食品の摂取や水分量の確保、適度な運動を支援し、便秘の予防に取り組んでいる。また、水分量は24時間水分摂取シートで個々の水分摂取量を把握している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週3回の入浴支援を行っている。曜日の変更は難しいが、要望に合わせて時間帯の変更を行うこともある。入浴するまでは拒否する利用者もいるが、湯船に浸ればリラックスして入浴を楽しむ様子が見られる。	脱衣場や浴室に職員が待機し、快適で安全な入浴を支援している。お好みのシャンプーや木綿のタオルを使用する入居者もある。入浴を拒否し抵抗されても、本人が清潔になって気持ち良くなれば嬉しいと、担当職員は話している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や心身の状態を考慮し、お昼寝を促すこともある。また、夜間の安眠につながるように、日中、適度な運動やレクリエーション、日向ぼっこなどを取り入れている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服用している薬の目的や副作用、用法や用量については個別の服薬管理表に綴じており、いつでも全職員が確認できるようにしている。また、薬の変更があった場合は、口頭・日誌・目の付きやすい冷蔵庫にその旨を記入している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの残存能力を考慮した作業や得意とする家事をお願いしている。嗜好品は、希望があれば個別に購入したり、持ち込みをする利用者もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日に散歩や日向ぼっこ、園庭でランチ会を行うなどしている。季節ごとの花見は恒例行事である。自宅へ荷物を取りに行ったり、気分転換に庭木の様子を見に行くこともよくある。イベントのみではなく、日常的な外出の頻度多く持ち、単調な生活にならないような支援をしている。	感染防止に配慮しながら、手作り弁当持参で季節の花見に出かけ、その折の笑顔満載のスナックがホーム便りに掲載されている。朝の散歩は恒例となり、四季折々の山里の風景を楽しんだり、外出を億劫がる入居者はテラス席で外気浴を促している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	通院の際に売店や自動販売機で、利用者自ら買い物をすることもある。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、子機でいつでも自由に自室で電話ができるように支援している。家族へ年賀状や暑中見舞い、手紙を出す方もいる。現在、携帯電話を所持している方が1名いる。職員が使用方法の支援を行うこともある。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一般家庭のような居心地の良い雰囲気を心掛けている。自室より居間の方が安心できる利用者がおり、毎午睡を居間のソファで行っている。また、玄関と洗面所には生け花や季節ごとの制作物を飾ることで、季節感を採り入れている。	玄関隣の事務室からガラス越しに居間や厨房が見渡せ、居間の食卓では、恒例の食材の下ごしらえが行われ、懐かしのメロディに合わせた大きな歌声に拍手が聞こえる。空調が管理された居間のソファで昼寝をする入居者もあり、落ち着いた暮らしぶりが伺える。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関前にベンチ、居間にソファ、玄関ホールにソファ、廊下にもベンチを設置し、利用者がいつでも好きな場所でくつろげる共有空間にしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や雑貨を持ち込んでもらい、本人が居心地よく過ごせるように工夫している。自由に模様替えを行う利用者もいる。	居室入口には入居者の写真が掲示され、テレビや筆筒、椅子が持ち込まれ、家族写真を飾っている居室が多い。畳敷きの居室にベットを搬入したり、読書が趣味の入居者の居室は小説本や新聞が置かれるなど、どの居室も整理整頓され居心地よく過ごせるように支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレには大きく「便所」、各居室には顔写真付きのプレートを下げることで、自立した生活が送れるように工夫している。		